

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第109号（2015年6月）

風に吹かれて（87）

白井啓治

『土竜よ許せ トマトが大事だ』

昨年不本意ではあったが、トマトを植えてある畑を土竜に荒らされ、根を痛めつけられたので捕獲器を設置し、庭の主ではないかと思えるような大土竜を二匹退治した。それ以後、土竜はやって来なかったのであるが、トマトに青い実が沢山つけ始め楽しみが膨らんでいる所に、また土竜がやって来た。

トマトを植えてある畝には、シーズンが終わると生ごみを毎年埋め込むので、ミミズの繁殖場のように土を掘り返すとわんさか出てくる。何せ台所から出る生ごみの大半を埋め込んで土に帰してやるのだから、途中の腐敗する時期にはミミズたちにとっても馳走の大地となるのだ。またミミズの糞などが植物の栄養になるのである。

そこに土竜たちがミミズという餌を求めて掘り進めてくるのだ。狭い庭だから、二匹も退治すると居なくなる筈なのだが夏になると決まってやって来るようである。

今年はやって来ないかと安心していたら、トマトの実が生り始めたこの時期矢張りやって来た。放っておくと、トマトの根っこの辺りを縦横無尽

に穴を掘り進めるので、今年も不本意ながら捕獲器を仕掛けた。危険を察知して逃げ出してくれれば嬉しいのだが、逃げ出しはしないだろう。また丸々太った大土竜が捕獲されるに違いない。

さて、五月は観測史上最多の夏日を記録したという。お蔭で、野菜の成育に大きな影響が現われ、例年になく野菜の高騰を見ている。猛暑、酷暑の夏にならねば良いが。

どんな真夏がやって来るのか気になるこの八月は、広島・長崎への原爆投下から、そして日本の敗戦から70年となる。70年が過ぎると、もう原爆の体験者、敗戦を報ずる玉音放送を知る者達も少なくなってしまう。

今、国を、社会を第一線で動かしている者達は戦争も原爆も、歴史でしか知らない者達である。しかも「もう戦後ではない」と言われた時以降に産まれた者達が大半であってみれば、戦争や原爆は歴史の一コマとしての認識なのであろう。かく言う小生も戦中生れとは言え、母親の背に負わされての戦争体験で、意識にあるものではない。

戦争や原爆を一つの歴史として認識する者達にとって、戦争も原爆もスマホのゲームとなら変わらないのかも知れない。ゲームソフトの変更をすると同じ感覚で、国の未来も考えているのだと

したら、そこには人間の生きるという切実さを失ってしまっていると言えよう。

憲法の解釈改正で、現総理がポツダム宣言の内容を問われて、つまびらかではないと平気で答える程に、戦争は歴史の隅に追いやられている。

是々非々で、とは政治家たちが常用する都合主義的な言葉である。本来の意味は「都合主義な言葉ではない。良いものは良いし、駄目なものは駄目、という事なのだが彼等には使い方が違うようである。」

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

現憲法は戦勝国から押し付けられたものだから、自主憲法を、という。これは是非々の論議にはならない。誰が創案しようがその中身が重要であることは言うまでも無いことである。

「戦争を放棄した憲法」を「戦争をする・戦争が出来る憲法」に改正しようという事であれば、是非々で論議が出来る。しかし、戦争が出来る憲法に改正しようなどと提起したら賛成するものは一人もいないだろう。

歴史というのは、過去の事実としての点群の総称で、事実としての点群から一つの経験則を導き出し未来を計るという重大な情報と断言できる。しかし、そこには重大な落とし穴も存在している。

時間軸を輪切りにし、その面にある事実としての点は、それこそ無限大にある。ある意図を持って点としての事実を選択し、時系列に繋ぎ合わせていくと、一つの経験則として構築する事も可能という事である。本来の経験則とは違うものではないが、これを経験則と言われてしまえば、納得する者も出てくることは事実である。

そして、意図的な経験則にそぐわない事実の点は、所謂歴史の隅に置かれてしまうのである。歴史認識がちがうと大騒ぎするのはこうした落とし穴にはまってしまっていると言える。或いは、嵌めようとしているのかも知れない。

日本が太平洋戦争に敗戦して僅か70年に過ぎないのであるが、敗戦時の事実の点を選択し直して、狭い視野での明日を計ろうとしているように思えてならない。

人生七十古来稀なり、とは言いが現代人の頭の中は「古来稀ならず忘るるべし、捨てるべし」になってしまっているのではないだろうか。

当風の会の兄妹である「ことば座」では、ギター文化館の主催するコンサートシリーズに、里山と風の声コンサートを共催しているのであるが、今年は第7回を迎える。7と70の語呂合わせではないが、原爆・敗戦の70周年に当たって、我々も何か発信できるものは…と木下館長と相談の結果、映画「ひろしま」の上映をコンサートに合せてやろうという事になった。

木下館長も小生も古稀を越えて、古来捨てるべしと言われるかもしれないが、原爆・敗戦70年に伝えるべきことを伝えようという事になった。映画の上映とコンサートは、当会報にも一回目の広報を載せたが、長崎原爆の日8月9日に決まった。少しでも多くの人に、原爆の悲劇の真実、戦争の悲惨な真実を伝えられたらと考えている。

このコンサートでの朗読には、小生の数少ない茨城の友人である美浦村の市川紀行兄に「今、我らの伝えるべきもの」の詩の創作を願っており、昨年に続いて北海道の若きギタリスト亀岡三典君のギター演奏をバックに披露したいと思っている。

先月のこと、当地で開かれた縄文の会の講演会で、日本語になった縄文語の研究者である鈴木健兄と同席した。その時に兄より、岩間在住の被爆者である方の自分史「末期の水」の一部コピーを頂いた。その中の原爆投下の章に、映画「ひろしま」にあるシーンと同じ文章が書かれていた。

鈴木兄より、いか様に活用されてもかまいませんとお話したので、映画の上映当日、少し紹介したいと思っているが、それに先立ちここにその一部を紹介したい。

『…市内から負傷者を運ぶトラックが着き、井

戸水で手を洗う運転手の方に、市内在住者だからと頼んで一人だけ荷台に乗せてもらい広島に向って家路を急ぎました。車も負傷者をはこぶために全速力で走りました。後ろに乗った私も振り落とされまいと必死でつかまりました。荷台は異様な臭気がただよい息苦しかった。五日市近くになると、家々が半壊状態になり、道路に座り込む人、倒れている人、歩いている人も皆ことごとく皮膚を布の如くぶらさげ、お腹もオツパイもふくれ、髪はチリヂリのまま両手を前にぶら下げ、家路の方向にフラフラと歩く男か女か、大人か子供か判別できない人の列を、トラックの上から息をのみ掌にビッシリ汗をかいて通り過ぎました…』

この文に書かれている光景は、映画「ひろしま」の中で、山田五十鈴が瓦礫、死人の中を子供の名を呼び歩くシーンに全く重なるものであった。

敗戦70年のこの年、歴史という事実から目を逸らさず、そこからどのような明日への経験則を導き出すかが問われているのではないだろうか。

当会報「ふるさと風の会」も、今月から十年目の第一歩である。ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える、を軸に、自由で自在な意見を言葉に表現する会の会報であればこそ、事実の先にある真実を求めながら、これからの一年を過ごして行かねばと、改めて思っている。

会の最長老である打田兄の挑戦している「私本平家物語」もこの夏には完結する見通しである。

・歩いて歩いても一本道のつづく
・ぐるっと見渡せばふるさとの風

やつぱり「晴耕雨眠」

菅原茂美

「文明」つてエのは、一体、どこまで進化すれば、人類は満足するのだろうか？

資源が尽きようが環境が汚染しようが、お構いなし。未来の子孫がどうなろうと今の今、我々が便利さを享受できれば、後は知ったこっちゃない。未来の事は、その時代の連中が考えればいい事…。これではあまりにも、無責任ではありませんか。

あらゆるものをコンピューターが制御し、ビルが林立し、地下に、空に、ついには宇宙にまで、人類は生活圏を拡大しようとしている。この星で異常繁殖し、狭くなったので、他の惑星にまで、触手を伸ばしたいのかな。

これでは、人類という動物の脳味噌が、狂いだしたとしか言いようがない。人類は700万年前に誕生して以来、緩やかに進化してきたものを、1万年前、農耕・牧畜の生活が始まるや否や急激に我慾をツツパリ、争いの絶えない蛮行の連続。経済優先・人権第二は、最悪のパターン。

「種」というものを維持するため、自らを律する機能を逸してしまえば種は滅びるだけ。生き残るためには「セルフコントロール」これしかない。数千年の文明を積み重ね、21世紀を迎えたというのに、何の智慧もない。目の前の便利さだけを夢中で追求する。今、オレが手に入れなければ、ライバルの誰それに先を越される。何が何でも、その権利はオレが先にせしめなければ…と。

これじゃ、まるで阿修羅のバトル合戦だ。こんなセツカチは止して、もっとスローペースで進行すべきだ。この世に生まれた喜びをゆつくり楽しむ。雨の日は、ゆつくり居眠りでもして、少し頭

を冷やした方が、いいんじゃないでしょうかね！

*

こんな片田舎の一介の老人が、世界の文明を、真つ向批判するなど、身の程知らずと、誹りを受けるかもしれないが、今日の世界情勢を見ると、そうそう黙ってはいられなくなる。

どこかの宗教集団が、偶像崇拜を禁止するとかで、古の人類が営々と築いた文明の遺跡を、いとも簡単に壊していく。ドラム缶に一杯の爆薬を並べたて、一瞬にして世界遺産を吹き飛ばす。

かと思えば先進文明国が、未開地に乗り込み、古代人が築いた遺産をさつさと持ち帰り、戦利品のように博物館に飾り立てる。マヤ遺跡を訪ね、歴代の大王の彫像が、歯が抜けたように所々無くなっている。文明国の何が大博物館だ！ 盗品陳列館ではないのかと、無性に腹が立つ。

マルコポーロは「東方見聞録」で、アジアの東端に、黄金でできた建物（たぶん平泉の金色堂）があるらしいと述べたら、コロンブスはさつそくそれを奪うため、航海に出、着いた所が西インド諸島。これがアメリカ発見の元になったという。

要するに人類の歴史は、弱肉強食。強い者は、弱い者から何やらを奪い取って、己の腹を肥やす歴史とも言える。私に言わせれば、人類の脳進化的方向は、完全な利己主義の強化。それを完成させるため、あらゆる研究開発に全力を尽くす。賞を設けて、それを称賛する。「相互扶助」とか、「共栄」などという文字は、全く絵にかいた餅。理想ではあるが、遙か夢の彼方の「幻」だ。

どうして私の目は、人類の歩む方向を、こんな悲しい裏面のみに向いているのか。人類の栄光などと囃し立てるものには余計にも、反発したくなる。

少年の純粹な目。少女の躍動する歌や踊り。道を極めた人の芸術や文学。いくらだって美しいものがこの世に溢れているというのに！

*

文明の進化が、しつかり秩序を守って穏やかに発展するなら、文句はない。未開地は未開地で、それでよい。そつとしておけばよいのだ。しかし、どこかの先進国が、未開地を荒らしまわり、先住民をないがしろにする。この地球は「未来の子孫からの預かりもの…」などという深遠な概念は、何処かの仙人が唱えている空念仏ぐらいにしか、感じないのであるか？ 機械文明のみ異常なまでに発展し、そのおこぼれを、後進国に高額で押しつける。特に武器とIT産業は酷いもんだ。

そもそも先進国つてエのは、「自国の利益」最優先に凝り固まっている。それを見習って、負けてなるかと、なりふり構わぬ途上国もある。古の世界制覇の幻に踊らされているのか？ 乱れた世の中を救おうとした先哲の尊い思想は、腹黒い強欲な支配者により、いとも簡単に踏みじられた連続であつたように思われる。ソクラテスの「悪法もまた法なり」が罷り通る。

国政を預かる者は、まず「国益」が第一。それは選挙で多数票を獲得するためには必須の条件ではあろう。しかし、自国の利益優先ばかりを押し通せば、相手国は、泣きの涙。世界はグローバル化時代。相互利益でこそ、世界平和は進行する。TPP交渉で不合理な条件を強引に押し付ける手法。日本からは自動車部品、アメリカは農産物の関税をもつと下げる！と強引に迫ってくる。互いにTPP反対のデモを繰り返しなが…。これが同盟国同士の交渉の仔細かと、呆れてしまう。

日本には「米」の食文化がしつかり根付いているのに、余剰農産物を無理やり押し付けてくる。戦後、米ばかり食べていると、頭がバカになる。小麦粉のパンは、あらゆる栄養に富み、発育盛りの学校給食に、最善の食材である……として、むりやりパン食を根付かせた。そして子供が成長すれば、自ずとパン食主体の食生活が定着し、日本は永久にアメリカの余剰農産物を買いつけなければならぬ仕組を強制された。動物タンパクも、発育には絶対必要。余剰農産物を家畜飼料として輸入させられ、食糧自給率は低下の一途。農業破壊はすさまじいもの。学校給食に米が復活するのはかなり後の話であった。食糧自給率が半分にも満たない文明国なんて他にありますか？ TPP交渉の不合理さは、15年3月号で、私は、さんざん悪態を述べたが、未だに肚の虫が収まらない。

いつか書いたがアメリカは武器産業で国家を潤おしている。新鋭兵器とは効率的に人を殺す道具。発展途上国は、使い古した旧式の武器を買われ、貧しい国家予算なのに軍事費を削れない。私が駐留した中米のある国では、国営の発電所が予算不足でしょっちゅう停電。それなのに空には、戦闘機が毎日ブンブン。隣国同士が仲違いになれば、アメリカは、陰でほくそ笑んでいるに違いない。表向きは安全保障。内心は戦争大歓迎。

*

近年の世界傾向として、「科学技術万能主義」が過剰気味と言えるのではなからうか。

自動車も列車も航空機も、完全にコンピュータ制御。いかに訓練を積んでも人間は過ちを起こす動物。突然健康異変を起こしたり、ぼーっとしての失念。集聚力が切れることしばしばある。

最近、ドイツの旅客機の副操縦士が、機長を締め出し、多数の旅客を道連れに、アルプス山脈に激突。なんじゃこれは。ならばいつそのこと、全てを前もってプログラムに組んで自動操縦。パイロットは、何か予期せぬ緊急事態発生時にのみ、自ら操縦桿を握る。自動車も列車も同じ事。こんな時代が早々に来そうだと未来予想もある。しかし機械は万能か？ 絶対狂いは無いと言えるのか？ 電話・金融などしばしばストップするが、世の中に「完璧」などあり得ないと思うがね！

それにしてもJR東海の「リニア中央新幹線」。2027年、時速500kmで開業を目指しているが、4月21日実験線で、有人走行世界最速の時速603kmを記録した。秒速167¹⁾である。公害をまき散らさなければ、正に「夢の超特急」である。浮上して走るのだから、揺れは極めて少ないそうだが、さて人類はどこまでスピードを求めるのであるうか。生物としての人類は何を求めて、それだけのスピードを追求するのか。次は必ずそれを打ち破ろうとするものが現れるに相違ない。無限のスピード競争。人類はどこで満足するのか。

同じような事が、絶滅危惧種の枯渇問題。もしかしたら、ウナギやマグロが絶滅する前に、人類が先に滅亡するかもしれない。奢り栄えた者の哀れな最後が目に浮かぶ。

*

最近アメリカで話題になっている「ナノロボット」(ナノテクノロジーとロボット工学の結合産物)と来ては、一体、世の中どうなってるの？ と目を丸くしてしまう。新聞報道によればナノロボットは、医学分野ですでに活躍の予兆を見せているという。抗がん剤を患部に正確に送り届ける。そう

すれば抗がん剤の副作用の心配はなくなる。血管や臓器の補修や代替にも使用されつつある。動脈硬化でいつ破裂するか心配もなくなる。心筋梗塞も、脳梗塞も過去の語り草となるか？

更に将来は、栄養の摂取も排泄も、ナノロボットが代替し、消化器官は不必要とのこと。これなら胃癌も大腸がんも起こりつこない。もし、脳細胞から凶暴性を惹起する遺伝子を完全に不活化し、フレンドリーな行動を起こす遺伝子のみを活性化する操作など自由にできたら、そりゃ世の中は、平和になるだろうが、人間の個性とか、人格などまるで関係なし。プログラムに左右されるただのロボット集団になってしまうに違いない。

もはや、こうなれば、私が以前に何度も書いた「人間とは何か」という疑問にぶち当たる。どこからどこまでが「自分」なのか。

人間は60兆個の細胞からなり、ほぼ2万4千個の遺伝子によりプログラムされている。しかし、人体にはほぼ600兆個の細菌が共生している。人間の生命活動の基本をなすのは、実はこの細菌の遺伝子の働きによるもので、人間の遺伝子は、生命活動の1%ぐらいしか活動していないという。

そうなれば、一体「自分」とは何だ？ という疑問に悩まされっぱなしである。また、女性は、妊娠中、胎盤を通じ、母の細胞が胎児に、逆に胎児の細胞が母親に移行することが明確になった。

女性が年若いリユーマチになる例が多いが、その原因の一つは、数十年前妊娠した時に、我が子から移行してきた細胞を、これまで寛容してきたのに、老化してくると、突然免疫機能が攻撃し始めるために起こる「炎症性の自己免疫疾患」とされるという。逆に子は、母から来た細胞を、年老

【一人の人間というものを考えてみよう。どこからどこまでが自分自身なのか？ 細胞は毎日更新され、一年前の細胞は殆ど入れ替わっている。ということとは、何年か海外で暮らし、日本での食べ物と、かなり違った食生活だったら、体を構成する細胞の原子配列はかなり変わっているはず。どこの国のアミノ酸も同じはずではあるが、同位元素の含有率など、多少の違いはあるはず。ならば、外国から帰ってきたら人格がまるで変わってしまったなどという事は、いくらでもあつてよさそうであるが、そんな事はめつたにない。肉体も人格も、恒常性はほとんど貫かれている。

*

する。地上ではその電磁波を再び電力に変換し、無限の電力を宇宙から受け取れる。

【私の夢のシステムは、①地球の影がない両極の上空に、太陽光発電システムを浮かべ、電力を電磁波に変え送信。②電力消費の多い中緯度地帯上空に、中継衛星を浮かべ、①から受けた電磁波を地上に向け再発信。③地上の電力消費地に、電磁波を再び電力に変換する施設を設置。④工場や家庭に有線で送電する。】

それが夢ではなくなった……と先日新聞に載っていた。同じような夢を見る技術者が実際にいるものかと驚かされた。地上のソーラー発電機から、電磁波受信装置まで、わずか500坪であるが、その実験に成功したという。ワイヤレスのため、エネルギー変換を2度も繰り返すので、効率は極めて低いが、全く公害のない、極めて有効なエネルギーを獲得するノウハウが見えてきたと報じられた。

自分で見た夢なのに、それが現実稼働するとなれば、果たして人類は、そこまでやっていいのか？ という疑問が湧いてくる。

臓器は人工に置き換わり、整形で美男美女ばかり。食糧は栄養計算に基づいた加工品。現在の宇宙食の方が、まだ味わいがある。音楽演奏は完璧な機械演奏。文学さえ世界の秀作の断片を切り張りし、恋愛だろがサスペンスだろが勝手に組み立てられそう。囲碁将棋のコンピュータは、かつての高級者棋戦から「棋譜」を記録しており、その中から、そのつど最善手を選択し、今や名人を負かすまでになった。

最も恐ろしいのは、核弾頭ミサイルの保管と発射ボタンの制御機能。何かの間違いで、攻撃せよ

*

諸悪の根源は、人口過剰。日本列島に縄文人は10万人だったという。4000体もの縄文人骨に戦による傷跡は見られない。ところが、弥生人が100万人も一気に渡来してからの骨には、無数の傷跡が残っているという。世界いたる所、人口過剰が戦争を呼び、破壊へとつながる。

5

地域に眠る埋もれた歴史(3) 木村 進

かすみがうら市出島地区(3)

○ナギの木

今日は夜中からかなり風が強く寝ていても怖いくらいでした。案の定、常磐線は運転見合わせが続き、大変です。気温は暖かいのでどこもいかに家でのおんべり過ごししました。

出島の歩崎(あゆみさき)から霞ヶ浦大橋の方に向かって湖岸に近い道を進むと大きな木が見え、そこに何やら立て看板が見えました。

何か分からなくてもまずは確認に、車を止めて見に行きました。

ナギの木の古木で樹齢約300年程の木だそう。なぜ、神社や寺でもないところにナギの大きな木があるのだろうか。しかしこの大木があるのは大きな御屋敷の敷地で門なども古くからありそうな感じだった。

ナギの木も前に行方市麻生の常安寺にあったことを思い出した。やはり神社などをまわると少しは知識が増えてくる。このナギの木は熊野神社の御神木で、熊野信仰に関連したところに植えられているという。こちらはかすみがうら市の指定文化財だそう。

立て看板に書かれている説明を示すと、「マキ科に属する雌雄異株の常緑高木で、日本では近畿以西の暖地に自生しています。葉脈が強く切れにくいところから、「弁慶泣かせ」「力柴」とも言われ、神社仏閣や庭園にも植えられています。開花は5月、実は1.5cmの球形で、10月11月に熟し油が採れます。樹齢は300年位と推定され、県内屈指の大きさです。」

そうそう、熊野神社の御神木のナギの木は樹齢1000年程だといえますのですごいですね。

またナギの漢字も「榔」と書かれています。春日大社の天然記念物にもこのナギの林があるそうです。こちらの漢字は「雌木」と書かれています。これは雌雄異株のため、「めぎ(女木)」のことです。

ナギの謂れは、「風(なぎ)」からきているようで、海の守り樹として植えられたのではないのでしょうか。さて、私は詳しくないのですが、女性が鏡の裏にナギの葉を入れるというむかしからの習わしがあるそうです。これは「男女間に波風がたたない、あるいはナギの葉が切れにくいため、縁が切れず、会いたい人の姿が鏡面に浮かぶ」という言い伝えだそうです。

ナギの木一つとっても結構勉強になることがあるのだと我ながら感心してしまいました。こんな風の強い日に「なぎ」風に関係する「ナギの木」の話も覚えやすそうでいいですね。

○牛渡鹿島神社

かすみがうら市の一部で霞ヶ浦に出張った半島のような旧出島村地区。今まで近くにいてもあまり見る物は少なくどのようなところが理解できないでいた。石岡が昔の常陸国の国府があつて、古道である律令制の始まった頃の東海道がこの出島地区を通っていたとするとどのようなルートだったのか。今ではまったく想像できない。

まあ、そんなことを考える人もほとんどいないようで、明治に出来た鉄道が人々の生活も、物流・情報の流れも大きく変えてしまったようだ。しかし、逆にあちこちを見て歩くと逆に今も変

わらない昔の姿を想像することも出来そうなノンビリとした場所でもあった。今回紹介する牛渡(うしわた)地区は、4〜5世紀頃から、まだ中央政権の力が及んでいない常陸国(中央から見れば蝦夷などの人々が多く暮らしていた地区)に入るのには対岸の美浦村牛込地区から舟で渡ってきたのだらうと考えています。この牛渡鹿島神社はとも変わつた祭りが残されているので有名です。江戸時代から続いているという「へいさんぼう」というお祭りです。(毎年5月5日)この「へいさんぼう」という名前も漢字では「平三坊」と書き、何か意味があると思いましたが、地元などの説明では「平さん(お百姓さんの名前)女房」がいつの間にか「へいさんぼう」となつたといひます。

田植えの時期に米の豊作を願つてお腹に子を孕むことを掛けて願つた祭りだそうです。このようなお祭りも人前でやるのが段々と厳しくなつていつて止めてしまったところが多いそうです。しかし、おおらかに行なうことの方がよほど健全だという気がします。

映画「米」の中でも冒頭にこの祭りの様子が紹介されていますが、昔は結構あちこちに似たようなお祭りはあつたのではないかと思っています。

鹿島神社の鳥居から参道が広々ときれいにしてありました。また参道はこの鳥居より手前も伸びていたが、昔はそちらからが正式な入口と思うも、道が入り組んでいて入りづらい。

この出島地区にも多くの鹿島神社がありますが、ここの鹿島神社は「本鹿島」と言われており、大同年間(806〜810年)に創建されたと言われています。常陸国府(石岡)に着任した勅使は常陸一宮である鹿島神宮に参拝するために高浜から舟に

乗り参拝に行きました。この時にこの鹿島神社に休憩のために立ち寄ったとも言われています。

私はどちらかと言うと、この時（鹿島神社参拝）に立ち寄ったのではなく、国府に着任・離任の時に立ち寄ったことがあるのではないかと考えています。少し沖に船を停めて、小舟でここを上陸しお参りしたとも言われます。その際に停まっていた船に残された牛が勅使を追いかけて湖に入り、岸をめざし泳いだ力が力つきたとの話は嘘か本当かはわかりませんが伝わっています。ただ、このような話は嘘でも本当でも伝えていくことは大切だと思っています。伝えていくべきは話の内容ではなくて、その話が生まれた背景が伝わっていくからです。その牛を葬ったのが近くにある牛塚古墳です。

この神社はやはり戦国時代は小田氏の管轄で、佐竹氏に滅ぼされた時に神社も滅亡し、後に再建されたと思われます。古くは平将門の国府攻略時に焼かれたのかもしれませんが。そのような話も伝わっているようです。また、源義家（八幡太郎）の奥州征伐時に立ち寄ったとの記述も見かけたが詳細は不明です。この神社の鳥居はかなり重厚で、この左側にはおおきなタブノキの古木が聳えています。この鹿島神社の場所は意外にわかりにくく、この辺だと適当に見当をつけていき、何度かまわりをウロウロしてあきらめたことが数回ありました。これもカーナビがないせいもあるが、ウロウロしているとは別な発見もあるものです。湖沿いを走る県道二〇号線からの神社入り口方面に入るところに置かれていた地蔵像や、道路わきに置かれていた石仏群などを発見し嬉しくなりました。

○坂本九と霞ヶ浦

「坂本九」とこの霞ヶ浦のお話を少し紹介します。坂本九さんは神奈川県川崎市で1941年12月10日に生まれました。本名は「大島九（ひさし）」。

名前のとおり九番目の子供でした。父親は坂本寛。母親は「いく」でその旧姓が大島です。九の誕生日は真珠湾攻撃の2日後で、太平洋戦争に突入した時に生まれたのです。そして、戦争が激しくなり、母親と茨城県笠間市に疎開します。（笠間には「九ちゃんの家」などがあります）この笠間は母親の実家があった場所で、坂本九の結婚式を笠間稲荷で挙げたため、知られてもいますが、実は、笠間に行くとうと上野を列車で母親と出たのは1943年10月26日です。2歳にまだならない子供でした。この常磐線の列車が土浦駅で貨物列車と衝突し4両が脱線し、そのうちの1両が桜川に転落し死者110名、負傷者107名の大惨事が起こりました。

この時、この川に転落した車両に最初は坂本親子は乗り合わせていたそうです。しかし、途中で車両を移ったために無事だったといえます。このことも笠間稲荷信仰の元になっていたようです。この鉄道事故の話はさて置き、坂本家がここ霞ヶ浦にも深い関係があります。

前に田伏城の話を書きましたが、霞ヶ浦大橋の手前あたりを「田伏」といいます。ここに坂本九の祖父が住んでいました。祖父の名前は「坂本金吉」といいます。実はこの方は魚の行商等をしていたようですが、秋田の八郎潟で魚がたくさん取れると知り、妻と息子（坂本九の父親）を連れて、八郎潟に移住しました。（明治30年代）そして、霞ヶ浦でおこなわれていた帆引き船の漁法を八郎潟に教えた人だといえます。秋田ではまたこれを改良し

て「うたせ舟」漁法と言われているようです。八郎潟のこのうたせ舟は干拓が始まる頃まではたくさん湖に浮かんでおり、八郎潟の風物詩となっていたようです。こんなつながりを知るとまた大島家の方とも茨城のつながりを感じますね。

石岡に残された「忠犬タロー」物語。九ちゃんの長女「大島花子」さんの歌「ここで君をまつてるよ」が幼稚園児の声で聞こえてきます。

○坂地区二の宮

霞ヶ浦の名物にもなった帆引き船。この漁法を発明した折本良平は出島村二の宮の漁師でした。この二の宮とはどこなのか、行ってみました。地図では坂という地名になっていますが、県道二〇号線の牛渡と歩崎のちょうど中間くらいになります。この通り沿いに「八坂神社」が建っています。比較的新しそうなのであまり目に止めていなかったのですが、その神社の隣に昔のお堂が残っていました。これはとても面白いです。新しい神社の横に古びた崩れたような石段が伸びています。入口には梅の花がさいています。石段を登った先にはお堂が一つと古びた地蔵が7体。そしてその周りには見事な竹林があります。

地蔵像はだいぶ古いようです。明治ではなく江戸時代のもののように思えます。首が折れてしまったものが一体あります。そして、そのそばには子安観音像が数体置かれています。

「子安」「女人講中」「享和二年?・・・」などの文字が彫られています。ということは1802年にここに奉納されたようです。比較的小さな二人のむつまじい感じの像がたくさん置かれています。新しく隣に出来ている八坂神社の拝殿と本殿

は海の方をむいて建っています。

霞ヶ浦水族館の近くには「帆引き船発祥の地」の石碑があります。また、歩崎観音の展望台の横に置かれていました。「折本良平頌徳碑」もあります。しかし折本良平の家はこの坂地区二の宮だそうです。神社のすぐ前の湖側に大きな家がありました。昔からあったと思われる赤レンガが残されており、高浜あたりの醤油醸造所の跡等に似ています。表札を見ると「折本」さんと書かれています。そうするとここが良平さんの出身の御宅でしょうか。少し歴史を調べてみましょう。今では観光用に霞ヶ浦に浮かぶ帆引き船が時々運行され、これを見るために観光船が運行され、近くで写真を撮るためにエンジンつきボートをチャーターしたりするくらいに霞ヶ浦の名物ともなっていますが、もちろん昔は、これは魚を採るために運行されてきたものです。江戸時代には高浜、高崎地区に「御留川（おとめがわ）」という制度がありました。高浜入りの霞ヶ浦が狭くなった両岸の領地が水戸藩に抑えられ、その間に挟まれた湖は川の場合と同じように両岸の領地の一部となつて、魚はこの水戸藩のものとなつていたのです。また、個人の漁師が霞ヶ浦で漁を勝手には採ることができず、それぞれ網元がいて、この網の持ち主（大徳網）が大きな利益を上げ、個人の漁師はこの網を引いたりして漁をする他なかったようです。明治になつて、御留川制度が廃止され、自由に採れるようになったのですが、その漁法はやはり大人数で網を引いて採る方法が主体でした。そんな中、なんとか個人の船で網を引かせることができないかと考えたのが、この折本良平さんでした。船に帆を張つて、風の力で船を走らせることはできますが（荷物を運

ぶ帆を張つた高瀬舟はたくさん浮かんでいました、網をつけて走つただけではほとんど魚は採れません。考えたのは帆を張つて船を横に動かすことでした。このアイディアを繰り返して試行錯誤を繰り返して、明治13年にいよいようまくバランスをとつて船を動かし沢山の魚（シラウオ）を採ることに成功したのでです。良平さんは46歳だったそうです。

そして、この漁法を秋田の八郎潟に伝えたのが坂本九ちゃんの祖父坂本金吉さんでした。明治35年に家族と八郎潟に移っています。

さて、この折本良平さんはどんな人だったのでしょうか。家は漁師もやつていた農家でもあったようです。農具の改良等も得意だったといえます。でもこの折本家は屋号を「あいや」という染物が先祖からの生業でもあったそうです。

現在残されている折本家のレンガの作りはこの頃からのものかもしれません。この帆引き船の漁法は霞ヶ浦周辺の多くの貧しい漁師にとつて救いの神と映つたことでしょう。今まで大徳網の曳き子として細々と生活していた漁師には夢のような方法だったのです。

○「太子古墳（安食）」

今回紹介するのはまず安食（あんじき）地区にある太子古墳（たいしこふん）です。ここも通りかかって看板を見つければ偶然立ち寄つたのですが、少しビックリしました。こんなものがこの場所にあるなんて思いもかけなかったのです。まったくフィを食らつたような感じです。ほとんど人も訪れることもない場所かもしれませんが、彩色古墳としては、ひたちななか市の「虎塚古墳」が有名なのにこは全くほつたらかしです。県道118号線に「太

子古墳」の矢印があり、その角を曲がるとすぐ通り沿いにあります。もともとは前方後円墳だったようですが、古墳はなく石で囲まれた横穴がいているだけです。説明では地元では「太子のカロウド」と呼ばれているとありますが、これは「大師の唐櫃」のことだと思えます。この穴の中には2体の人骨や刀とか須恵器等が出てきたそうですが、2体を葬ることはよくあるようなのでそれほど驚くことでもないのですが、問題は壁に彩色が施されていることです。

発見されたのは明治23年で発表されたのが大正時代だといえます。きつとそのころはもつと鮮やかな色をしていたのだと思います。

茨城県では横穴石室古墳で色彩を施されているのは虎塚古墳とここの2箇所だけだそうです。県指定史跡になっているのですからもう少し保護しないと色もなくなつてしまひそうです。古墳はこの石室のところだけであとは家なども近くにもあります。さて、成田線には安食で「あじき」と読む駅があり、つくばにある地名も「あじき」ですが、ここの土地は「あんじき」です。これもアイヌ語かもしれません。

（記事は2012年4月に書いたものです）

自然が秘めているもの

伊東弓子

三十年も前のことだった。ある部落のお爺さんの話に胸が踊つたことを覚えている。二十四時間明るい、暗がなく暗があれば犯罪を起す。芽を出すと除草剤で消される。延びてきた

枝は選定される。山への崇拜も大地の歴史もコンクリートに塗られてしまう。遠い宇宙も人の手で征服され、水も汚して生命を生み出す力はない。魚や鳥も囲いの中で生きていく。花も人の好みにつくられている。人の身体の中まで見通せる医療にどっぷり浸かつて満足している人間たち。

人は何を信じているのだろうか。不思議な物を見つける力はなくなったのかな。こんな状態では、あのお爺さんが幼い頃、若い頃見たものは捜しても見つけることは出来ないだろう。

お爺さんの子供の頃、豆腐を買いに山向うの豆腐屋まで行かされたそう。半道ばかりあったろう。細い山の中で心細い思いを抱えて部落外れの坂を降りる。その寸前馬捨て場が目に入ってしまった。急いで右に駆け降りるのが常だった。周囲は鬱蒼とした森。その中に幾つかの沼がある。木々が影を落とし底深さを感じさせる水面は一層不気味だった。季節季節に様々な姿を見せていたが、急いで通り過ぎるだけだ。

俺は部落の西の方に家があった。友達の手は東の方に家があった。秀は俺とは全く違う風景の中を酒買に行っていた。谷津田を横切って畔を歩き坂を上ると酒屋がある。谷津田は俺の通る沼からずっと続いて東の方へ、えんえんと繋がっていた。買い物に行くにも秀の方がずっと条件はいい。いつも二人でぼやくのも「つかい」のことだった。雨が降ろうが、風が吹こうが親父が「行っこい」と言ったら、行かなくてはならない。「金は母ちゃんに貰っていい」の二言だけ。母は俺たちが言っても小遣いはくれない。とれぞれ豆腐と酒の金だけだった。秀の家も俺の家も同じようなことだった。

沼から森、その周辺は霧が深い所だったそう。沼の周りは勿論、山道の方まで霧が立ち込めるそう。あの霧の正体は何だったのであろう。ずっと後になって聞いたことが嘘か本当かはわからないが、あの沼に身投げをした女がいたという話だった。

大雨が二三日続いた後のことだったが、稲荷さま下の沼添いの道を通った時、妙な音というか声というか耳に入ったという。

「ういっしゅ、ういっしゅ、ういっしゅ」

耳を澄ましてみても一向に分からない。自然に山の方へ足が向いたそう。

「ざあーわ、ざっざっざ。ざあーわ、ざっざっざ」

音が変わったよう。また移動してみたが、「ぐっぐぐぐ、ぐっぐぐぐ・・・」

というだけ。大雨で地中の主が目覚めたか、何処かに流れでも出来たのか、と秀と話した。私は大分前、やはり大雨の後、あの山で聞いたことがあった。

「ざっざざっざ、ざっざざっざ、ざっざざっざ」

館山館に行く途中、市海道の山道で聞いた。地の下で、山を下る押水と思っていたが、お爺さんの聞いた音は、何であつたろう。

豆腐買いは弟の仕事になった。「俺も一端の男だ。豆腐買いはなんかいつまでもやってられつか、卒業だ」と秀と話した。酒買いは秀の弟がやることになったそう。

二人で沼の探検をすることになり、約束をし月の出るのを待った。下弦の月がみなも姿を現したのは大分夜も更けていた。二人で口にくそ出さないが、くっついて立っていた。何か異様なもの

ギター文化館

2015 CONCERT SERIES

- 6月14日(日) 高橋竹童 津軽三味線コンサート
7月5日(日) 莊村清志 ギターリサイタル
8月9日(日) 里山と風のコンサート ギター・亀岡三典
朗読・しらひひろち
9月5日(土) 福田進一 ギターリサイタル
10月4日(日) 河野智美 ギターリサイタル
10月18日(日) 村治奏一 ギターリサイタル
10月15日(日) 朴葵姫 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

を感じ不安でいっぱいだった。生温かい風が吹いて、白い人の影が急ぎばやに過ぎていった。その後には悲鳴にもちかい響きが尾を引いていた。それから冷たい風変って黒い一群が右往左往しながら闇の中に消えていったという。何という光景だったのだろう。この年令になっても二人が正気だったのか、二人で夢でもみていたのだろうか。今でも胸の中はすっきりしないそうだ。俺の近くの一つ、秀の近くに一つ館跡がある。その事と関係あるかと思いつけている。

谷津田の方へ目を向けると、里山の道を灯りが連なつて動いていた。灯りは一つ消え、二つ消え、二つ灯り三つ灯りと続いていく。その先に寺がある。墓もある。それとつながりがあるのかな。「ない。そんな事あるもんか。あれは狐の嫁入りだ」

と秀が否定した。楽しい気分の一夜でもあった。その後はあまり気になる事もなかった。

あれは若い衆になった頃だったと、話しが始まった。遠出の用事があつていつもの道を朝早く通った日のことだったという。霧が立ち込めていた沼の辺りが明るくなったようだった。そこに両手で長い髪を手繰るようにして立って娘の姿があった。その美しさは、そこにあるからこそその美しさだと、今なお目に焼きついてという。一人である時、見る事が出来たことが、実に満足だったという。二度と見ることはなかった。そして何気なく見上げた木に白鷺が止まっていたそうだ。

大人になって、家族をもつてと忙しく日をおくつていった。こんな大きな年令になった今だから一つ一つ振り返ることが出来ると言つて笑つた顔はいい顔をしておられた。まだまだ自然もたくさ

ん残つていて、人はその中で寄り添つて暮らしていた時だ。利用させてもらうという形で小さな破壊にしかすぎない頃だろう。自然界は、一つ一つが自己主張していた世界だったと思う。そこに自然現象と人間の感情が交り合つて出来たものだろうと思う。当時の多くの人があんな不思議な経験を味わつたことだろう。

現代人は、自然界とどうかかわつて、どんな感情を育ててるのかと思う。それ以上に子供達は、自然界とどうかかわつていくのかと心配するばかりだ。

私は終戦直後、小学低学年の時ベレー帽を被つた絵描きさんのお兄さんと、友達十人位でこの沼の道を歩いていったことを覚えていて。青年時代には沼の辺りで青年会員六人で、田植をした日。それは森が明るかつた記憶がある。円妙寺海道と府中へ続く道の所から、森のトンネルが見えた。友達のものしやんが「あつちは四ヶ村だ」と高い声で言つていた。その森のトンネルも広がつた道の下に、美野里、岩間へ続く霞ヶ浦の水が大きなコンクリートのトンネルの中を流れている。勤めもその道は自転車で行き帰りし頑張つた。霧は朝夕たちこめていた。

今はここの一帯は住宅地となつた。アパートも出来た。太陽光発電の設備も出来た。ちよつとした町の一角のようになった。

善光寺楼門裏の廃墟

小林幸枝

石岡市太田にある善光寺楼門の裏手の山の中腹に、半ば廃墟となつた本堂の建物があります。こ

こは映画などのロケ地としてもよく使われている様です。見た目にはいかにも妖怪が出そうな雰囲気のところだ。

この善光寺は、一五〇一年小田城主小田城治が創建したと言われています。善光寺楼門は国の重要文化財にも指定されています。善光寺楼門は室町時代中期の建物とみられて、県内最古の木造建築と言われています。楼門の奥には立派な五輪の塔や墓石が多数並んでいます。桜の木もあり、廃墟に近い本堂を桜の木越しに見ると、六月に公演する「緋桜怨節」の庵をイメージするのにピッタリの雰囲気でした。

物語は菖蒲沢の薬師堂の弁天池傍に堂守りの庵があるように設定されていますが、老女の話をする朽ちかけた庵をイメージするのに、建物そのものは違いますが、いい参考になりました。

石岡は、映画、テレビのロケに多く利用されているようですが、この善光寺の姿も今ではなかなか見られない雰囲気をもっており、大事に保存しなければならぬ所ではないかとおもいました。六月の定期公演の緋桜怨節は三回目の公演となりますが、鈴ヶ池・鈴姫物語に次いで、私の好きな演目です。これまで以上に表現の工夫を考え演じたいと思っています。宜しくお願いいたします。

県指定文化財3

兼平智恵子

四月、五月、六月そして七月と団体での（三十名〜五十名）史跡、看板建築の見学が多く町中に賑わ

いを頂いています。

県外では東京、神奈川、千葉、栃木等より、県内では日立、ひたちなか、水戸、牛久、取手等等。四月からオープンしました石岡市ふるさと歴史館

では一階での企画展は「陣屋門」から、六月より

「土屋辰之助と看板建築」の展示となりました。

市民の皆さんのご来館もお待ちしております。

お伝えします。県指定文化財、今回は三件ほどご紹介いたします。

○宝 塔 鈴

有形（工芸品）
指定 昭四〇・二・二四

所在地は若宮二丁目四番二十四号、真言密教法具の一つで、塔の形を表現している。高さ二二・八cm銅鑄製。加持（真言で行う呪法）祈禱、護摩などの修法を行う時に用いられる。塔鈴は眠っている霊を呼び起こす作用があると言われ細部の形式から室町時代の作と考えられている。本尊は不動明王（行基の作と伝えられている）で縁起は天正年間（一五七三～一五九二）に佐竹氏が府中城を攻めた際、戦火により堂宇や古記録が焼失した。塔婆鈴ともいわれた。

○漆皮軍配（伝太田道灌奉納）有形（工芸品）

指定 昭五八・三・一八

所在地は総社二丁目八番一号（常陸國總社宮）。小型の軍配と長い柄の形式は古く、室町時代の作と推定されている。総長四八・九cm、最大幅一九・一cm、柄幅二・六cmの鞆皮製黒漆の軍配。表には朱漆で種子を描いている。

寛文八年（一六六八）太田資宗、資次の寄進銘の

ある箱に収められている。

石岡市史（上）によりまずと永享年間（一四二九～一四四〇）太田道灌が戦勝祈願のため奉納されたもので寛文年間（一六六一～一六七二）浜松城主太田備中守資宗が金梨地（きんなしじ）の筐を寄進してその中に収められている。

太田道灌は室町中期の武将、歌人。扇谷上杉定正の臣。名は資長、俗に持資。築城、兵馬の法に長じ学問、文事をこのんだ。定正によって謀殺された。

○漆皮軍配（伝佐竹義宣奉納）有形（工芸品）

指定 昭五八・三・一八

所在地は総社二丁目八番一号（常陸國總社宮）。天正十八年（一五九〇）十二月府中城が陥落し大掾氏に代わった佐竹氏が奉納したもの。

安土・桃山時代の作と推定されている。総長四五・一cm、最大幅一八・〇cm、柄幅二・二cmの鞆皮製金漆の軍配。表には種子を中心に十二支を表し、裏は朱漆で佐竹氏の家紋の日輪を描いている。伝太田道灌奉納の軍配の制を踏襲したもので、価値の高いものである。

義宣は清和源氏義光流。常陸佐竹郷を本拠とする。頼朝の奥州征討に従い、南北朝内乱期には尊氏に与し、戦国時代小田原北条氏と対抗して秀吉に通じ、関ヶ原合戦で西軍に加わり、出羽秋田に移される。

この二件の軍配は、例年行われている「いしおか雛巡り」の際に常陸國總社宮 社宝公開で拝見出来る時があります。

以上三件のご紹介でした。

（参考資料・石岡市の文化財 石岡市教育委員会）

・過去を忘れる人と薔薇の香を行く

笑顔は忘れず 智恵子

【風の談話室】

今月は読者投稿が少しさみしい状態。多くの方からの投稿をお待ちしています。

堀江さんの養生日記今月号から二年目に入ります。体調や感情の起伏に苦しんでおられるようですが、続けて投稿いただけることを願っております。

《読者投稿》

養生日記（詩二編）

堀江実穂

「海と大地」

海は優しい母

大地は偉大な父

お姉ちゃんごめんね

弟君許してね

障害者という言葉に甘えている自分がいる
母も父も独り占めしている私がいる

自立しなければと自分に言い聞かせている
そして

頑張り過ぎるなども言い聞かせている

皆私を優しく包み込んでくれる

心は感謝で一杯なのに上手く言葉に言えない

もどかしい

ありがとうと素直に言葉に伝えられないでいる

私のことが

皆に、皆に、家族に伝えたい
ありがとう

「消えた過去」

振り返っても過去は戻って来ない
一秒一秒気が狂うほど几帳面に時は刻まれ、先
に進んでいく
時の刻みは進んでいく先のことだけを見つめて
いる

時は今と未来のためにある

時は過去のためにあるのではない

それなのに過去を思い出して涙する自分がいる
涙しても明日の笑顔が来るわけではないのに
遠い過去には笑っている自分がいる
でも近い過去には泣いている自分しか見えない
過ぎた時は、笑いでも涙でも今日の大雨に流し
てしまおう

大雨の後にはスッキリとした晴れがやって来る
過去はこの大雨に流してしまおう

過去を思っただちどまってしまえば

明日もまた立ちどまったままになってしまう

今この大雨に過去を流したら

明日には今思っている過去は無意味な過去にな
って振り返ることもなくなってしまう

過去は感傷するものではなく明日の左右を決め
る判断材料

時の刻む音に引っ張られて歩くのはやめよう

時の刻む音に背を押されて前に進もう

過去は終わった現実なのだから

もう振り返らない

《ことば座だより》

ネイティブ手話の不思議

白井啓治

四月に、東京立川市のイベントハウス「ラララ」
で手話舞の公演を行ったのであったが、我々の公
演の前週に手話パフォーマンス集団の公演があっ
た。今、マスコミにも取り上げられ始めた女性の
パフォーマンスが、小林のうわさを聞いて観に来た
かったそうだが、自分の公演と重なり来ることが
出来なかった。

その彼女が、ラララを主宰しているしおみえり
こさんに、小林さんってネイティブな聾者ですか
と聞かれたそうである。ネイティブな聾者とは、
一寸妙な気がしたが、彼女は小学校の頃に耳が聞
えなくなったそうで、彼女曰くは、生まれながら
に音を知らない人の手話は途中から手話が日常語
になった自分達とは表現の仕方がちがいで、ものす
ごく綺麗な手話表現をする、との事であった。

小生は、聾者の方との接点は小林幸枝が最初だ
ったので、後天的な聴覚障害者との表現の違いな
どに関しては、あまり深く考えることはなかった。

しかし、小林の手話の表現が、小生の知る手話
表現とは随分違っていた事と、これは彼女の天性
としての才能の問題であるが、舞台スケール感(舞
台映え)を持った人であることは、身のこなしで
直ぐに分かった。

彼女の手話をもっと大きくすれば舞になり、舞
台に掛けられると直感し、内弟子同様に来てもら
うことにしたのであった。

舞台スケール感・舞台映えする所作・動作は生
まれついで、個人としての才能で、訓練をした
からと言って一流のレベルに到達することは難し

いものと言える。

手話の話に戻すが、小生その手話パフォーマンス
とは直接話す機会はなかったのであるが、どうや
ら音の概念を知っている後天的聾者と音の概念の
持てない先天的聾者との手話表現には大きな違い
があるようである。

先月号で、小生の主張する聾語とイメージ手話
について少し紹介したが、イメージ手話による表
現は、多少とも音の概念を持つ後天的聴覚障害者
には、動作言語としての流動性、インスピレーシ
ョン性の問題で、使うのが難しいようである。

確かに小林の使う手話には、視覚と皮膚感覚だ
けで表現する独特の手話が沢山出てくる。それを
称して手話パフォーマンス女史などはネイティブ手
話と呼んでいる様である。

そして、ネイティブ手話と呼んでいる聾語、或
いはイメージ手話は自然に同化した風や流れを持
つ表現をつくりだしていると言える。

小林の手話表現が風や流れをもつことの証明に
もなる話をつい最近目にした。

日本語になった縄文語の研究者である鈴木健氏
より最新の著書を頂いた。その時、付箋の付けた
部分をぜひ読んでくださいと渡されたのであった。
早速その部分を読んだら、先の手話パフォーマンス
の言うネイティブ手話という言い方も有ること
の理解させられる一文が書かれてあった。

そこには、『ユキは、アイヌ語 i Ⅱ(それを) uk
(取る、受ける) i (もの)。雨と異なり雪は手
で受け取ることができるから、iuki ↓ yuki 雪か。
これは筆者の妄想である。と書いてしまったが、
そうでもなさそう。最近出版された土屋秀宇「日
本語(ぢ)と(じ)の謎」(光文社)に、「雪」の字

のヨの部分はもと中央線が右に突き出ていて、手のひらと腕を横にした様子を表していた。手のひらにふわりと乗る雨ということで、雪という漢字が生れた。とある。また当地の手話舞姫も「つくばねに雪かもふらる…」(万葉集)の箇所と同じく手のひらに雪を受け止める仕草をしてくれたのが印象に残っている」と書かれてある。

雪の手話は、親指と人差し指で輪をつくった両手を左右上から揺らしながら下ろしてくる表現をする。これで「雪」或いは「雪が降る」を示す。

しかし、小林の手話にはちらちら舞い落ちる雪とそれを手で受け取る仕草が入る。漢字の成り立ちに全く同じである。

人間の進化の過程を見ると、音声言語よりも動作言語(手話の下になった言語)の方が遙かに古い。実際に人間が音声でコミュニケーションが取れるようになったのは、二足歩行を始めてからずーっと後のことになる。二足歩行する事で声帯が下がり複雑音を出せるようになってからのことなので、複雑音を出せなかった頃にはジェスチャーである動作言語がコミュニケーション言語であった。

この様に人類史から見ると、漢字の成り立ちが、全く音の世界を知らない聾語(イメーじ手話)の中に数多くみられても不思議はない。

このように考えていくと、現代の日本語対応手話に対してネイティブ手話という区分けも正解なのかもしれない。

小林の手話舞に対して、これまで学問的な考察を持ったことがなかったのであるが、手話舞の広がり考えたとき、もう少し学問的な考察を積み上げた方がいいのかも知れない。

《一寸一言・もう一言》

Ⅱ一寸一言Ⅱ

馬を曳け!

打田昇三

東京観光に行く高齢者の定番は浅草だと思うが鎌倉時代には江戸の町が無くて浅草は観音堂で知られていたらしい。治承四年(一一八〇)の秋に富士川で平家軍を撃退した源頼朝は戦勝記念として由比が浜に在った鶴ヶ岡八幡宮を現在地に遷して大改築をした。諸国から大勢の宮大工が集められたが棟梁となる人物が居ない。そこで観音堂を建てた名人を浅草から呼んで一切を任せ短期間で鶴ヶ岡八幡宮を完成させた。

大満足の頼朝は棟梁に褒美として名馬を与えることにした。祝賀式の当日、馬を曳いて来て浅草の棟梁に渡す役を命じられたのは源義経である。頼朝に従う武将の中で別格だと思っていた義経は「何で俺が…」と思ったのか陰で愚痴を言った。それを聞いた頼朝は「神聖な職務に不平を言うとは何ごとか!」と激怒したと言う。結局、義経が平謝りに謝って馬曳き役を務めたらしい。

孤立無援の中から平家に対抗する組織を築いていった頼朝には一族だとか兄弟だとか情実や縁故に配慮する余裕など無かったのであろう。或る武将が西国の陣地から頼朝に手紙を出し「私は源氏一族として出陣してきたのに、家臣の梶原景時があれこれと口を出して困ります」と言ってきた。是に対する頼朝の返事が「お前など指揮官にした覚えは無い。前線に行つてさっさと討死してしまえ!」である。現代だと大ニュースになる。

情操教育の重要性

菅原茂美

世は正に機械文明万能時代。人間の知能や技術が本当に万全で、常に完璧なら、それも良からう。ところが人間のやることは、大方未成熟。便利なものができたと思えば環境を破壊する。生活が豊かになったと思えば資源が枯渇する。やることなすこと矛盾を孕(はら)んでいる。

誰かに都合の良いことは、対岸の人には、反対の結果をもたらす。「完璧」などというのは、単なる「幻」で、これが最高と見えるものも、制度疲労とか、時代の進化についていけなかったりする。機械文明の急速な進歩に、人間の根幹をなす情操教育が遅れを取り、隅の方に追いつかれた感がある。人間に真の幸せをもたらすものは何か? という配慮に欠けた結果が、多くの矛盾を生んだように思われる。

世界は経済優先主義で動いている。技術革新、効率化、成果主義。これじゃ世の中があまりにもギスギスし過ぎ。人類は数千年の文明を積み重ねながら、この程度の智慧しか浮かばなかったのか? 醜い競争原理を和らげ、人をいたわりながら程良く幸せを追求していく。怪しげな巨大な業績など残さなくともよい。穏やかな人生こそ、満足を得られる最善の道と思うが…。

そのためにはまず家庭が、そして学校・職場・行政も、情操教育にもっと気を配り、社会のシステムが円滑に進むよう、十分配慮する事が大事と思う。家庭においても、各世代がバラバラではなく、世代を超えて智慧を出し合い、一家を円満に築いていく。そうすれば眼を背ける様な犯罪は、起り難いと思うんだけど…。

Ⅱもう一言Ⅱ

歴史認識の錯綜

菅原茂美

論語の教えでは、子は父の悪事を隠すべきもので、それも正に親孝行であるという。孔子ともあろう賢人の言葉とも思えない。自国のかつての悪事は隠し通し、善行や美事のみを殊更、強調する。対照的に揉め事のある相手国の悪事のみを拾い上げ、これを囃し立て、世界に吹聴して、同情を求めたり、味方を増やそうとする。強烈な思い込みや誇張で、歴史を造り変えていく。それでは真の友好関係は結べない。

日本は従軍慰安婦を20万人も強制連行したと言ひ、南京で30万人も虐殺された！と言いたい放題。誇張過剰。いくら抗議しても聞く耳を持たない。関係のない他国にまで慰安婦のモニュメントを建立。南京事件はナチスのホロコーストと同格と、史実を歪曲して世界に吹聴する。

一方、国を売るような史実に反する報道を日本の大新聞が堂々と何年間も書き続け、それが真実であるかのような考えが定着した頃、『あれは間違いでした』と誤つても、もう遅い。それを真に受け、そうだそうだと、日本政府に謝るべきだと横やりを押す国もある。真実を隠し、受けた被害を拡大強調して新しい歴史を自国に有利なように作りこむ。こんな事が堂々で行われるのだから、世の中、どうなつてんの？

記紀や風土記など価値の高い歴史書も、戦に勝った方に都合がよいように書かれていると言うから、知らなければそれが真実だと思ふしかない。

過去を勝手に造り変えていくなら、輝かしい未来など、やって来るわけもない。

密議の果て

打田昇三

有名な川中島の合戦が行われた翌年ぐらいの話であるが、江戸城外の北西部に法恩寺という日蓮宗の寺があり、其処で太田道灌の曾孫に当たる太田新六郎康資が年末の先祖法要を行なつた。此の寺は康資の父（資高）が建立したものである。

江戸城を築いたのは太田道灌であるが、主君の扇谷家・上杉定正が馬鹿で、無実の道灌を暗殺したため太田一族は城を失つた。新六郎は小田原の北条氏重臣である江戸城主の遠山丹波守直景に仕えて直景の娘を妻にし、江戸城の西郭責任者に任じられていたが、曾祖父が築いた江戸城が自分の城では無いことが不満だったのである。

法要の席に集まつたのは康資と弟の源四郎、甥の源七郎、それに家臣が二十人ほどであった。此の寺には小堂が有り、法要の後で出席者は其処に籠つて密談を始めた。法事にしては雰囲気がいやなので住職が気にして会話を盗聴すると、是がクーデターの相談であつた。慌てた住職は責任が及ぶことを恐れて江戸城に密告した。

大事が漏れて追つ手が来たので、一行は同族の太田三楽斎を頼り岩槻城に避難をした。此の時に三楽斎の盟友であつた越後の上杉謙信は救援に向かう準備をしたらしい。二月に入って太田勢は葛飾で江戸城の軍と合戦をしたが勝てずに一族は散り散りとなり、三楽斎は石岡（八郷）に来たと思われる。法恩寺が在つた平河町・永田町近辺では

弓・槍・太刀での合戦はなくなつても政治的な権力の争いが現代も続いているらしい。権謀術数は何時の世も絶えることが無いのであろう。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻第三（一・二）

御産（ごさん）のこと

音読で「ごさん」と言われると「誤算」を思い浮かべてしまうが、庶民の言葉で言えば「お産」である。難産に苦しんだ中宮（徳子）に平清盛はじめ平家一門や公卿たちが右往左往して見当違いの葬式かと思うような祈禱が行われた結果、結論を言つてしまえば無事に男児（安徳天皇）が生まれて一同が喜ぶ話である。やがて後白河法皇を幽閉した平清盛が高倉天皇に強引な譲位をさせ、安徳天皇は僅か三歳にして皇位に就かされる。正に平家が絶頂に達した訳であるが、源頼朝の挙兵で平家は五年後に西海に追われ安徳天皇は二位の尼こと平時子に抱かれて壇ノ浦に沈む。平家没落の過程を考えると「御産」が「誤算」であつたと、言えないこともないような気がする。

この章段は赦免船に乗せられて既に鬼界が島を出た丹波少将藤原成経と平康頼入道が、無事に肥前国鹿瀬庄（有明海北岸）に着いたところから始まる。此の地は成経の義父である平教盛の領地であり、ここから鬼界が島に救援物資が送られていた土地であるから

ら刑務所を出所した二人も気兼ねしなくて済む。都から教盛が手紙を寄こして「年内は海が荒れて道中も不安であるから、暫くは加瀬で休養をして、春になってから都へ来るように」と親切な指示が来っていたから、それに従って九州で冬を越すことにした。ただし原本には「少将加瀬にて年を暮らす」とあるから、康頼入道は別行動をとったのかも知れない。そうしている中に、都では治承二年十一月十二日の夜明け前、午前四時頃になって中宮が産気づいた。御産の場所は平頼盛（教盛の弟）の屋敷になる六波羅池殿とあるが、其処は安産祈願の場所とする説もある。多分、平家屋敷であったと思われる。国宮放送で報道したのかどうか、六波羅を中心に京都中が大騒ぎになった。無事に生まれるなら何処の病院でも良いが、その場所に後白河法皇も見舞いに行ったらしい。清盛が憎い法皇は余程の覚悟で行ったのである。

法皇が行かれたとなると、普段は平家が憎い公務員たちも行かざるを得ない。関白とか太政大臣、公卿や殿上人と呼ばれる天皇近侍の者から、普段は目が出ない連中も出世を求めて「お見舞い」の効果で良い役職が得られるように位階が上がるようにと、一人も漏れずに詰めかけた。行く場所も平家屋敷と宮中と二か所になるから大変である。

こういう場合には（先例に依れば）大赦が行われて重罪に問われた者も許されるものであり、崇徳天皇の大治二年（一一二七）九月十一日に鳥羽上皇中宮の待賢門院（藤原璋子）が、雅仁親王（後白河上皇）を出産された時にも大規模の恩赦が行われた。その例に倣（なら）ってということで今回の恩赦が行われたのであるが、俊寛僧都だけが赦免されなかったというのは不可解で誠に気の毒なことである。赦さなかった

平清盛に対する非難や怨霊の報復も推測される文章であるが平家を恨む者は後白河法皇以下、大勢がい taraしいから俊寛独自の怨霊活動は未だ目立たない。いずれにしても中宮は御産を前に「陣痛」を起こしていたのであるから、待望の親王誕生を願う朝廷や平家は慌ただしくなった。先ず天皇が石清水八幡宮、北野の平野神社（平安京遷都の際に移された神）、大原野神社（武甕槌命などを祀る）などに行幸されることになり、天台宗の高僧である藤原氏出身の仙源法印が神前に願文を読み上げたが、神様も坊さんに祝詞を読まれたので真面目には聞いていなかったと思われる。その他に伊勢神宮を始め二十余の神社、東大寺を始め十六の寺に祝詞やお経を上げまくった。それらのことは中宮に仕える家来の中で官位を有する者が務めたが、その役に任じられた者は「平紋（ひょうもん）」という狩衣（公家の常用略服）を着て帯剣している。その者たちが、お経を上げた坊さんたちに配る品物や供える経文やら剣やら衣装などを捧げ持つて宮殿内の東の建物から南の庭を経由して西の中門から出て行く様子は壮観であり大勢が見物した。

その様に平家一族を中心に関係者が動揺する中でも小松の大臣（おとし重盛）は何事にも慌てたり大騒ぎをしたりしない人なので、派手な行列から少し遅れて嫡子の権亮少将（ごんのすけしやうしやう）皇后に関する職務を行う役所の次官級、近衛の少将を兼ねた平惟盛以下、平家一門の若者たち（それぞれの官位を有する）の車を連ねさせてから、平家が御祝に献上する衣服四十領、銀製の太刀七振などを専用の器（うつわ）に載せ、それを十二頭の馬に引かせて後に続いた。

是は、かつて（紫式部の時代に）一条天皇の中宮であった上東門院（藤原道長の娘・彰子）が敦成親王（後の後一条天皇）を出産された際に道長が献上の馬を引かせ

た故事に則ったものである。其れに加えて、平重盛は中宮の親代わりであったから（清盛が出家入道したので中宮・徳子は兄・重盛の娘として宮中に入った）父子の契（ちぎり）ならいとして馬を献上したのである。此の時に大納言であった藤原邦綱が二頭の馬を献上しているが余計な事はするものでは無く、都の人々は「誠意なのか、経済的に余裕はあるのか？」などと無責任に批判をしている。

経済的に余裕が有る平家は、他にも伊勢神宮から安芸の宮島（厳島神社）など七十余の神社に馬を献上している。さらに内裏（皇室）にも馬役所があったので其処に四手（しで）と言って現在でも神社や神棚にぶら下げる白紙（細く切った）を付けた馬を献上した。その数は数十頭とされる。神社の方は其の程度で済んだが当時は寺院のほうが威張っていたから、先ず「赦文」のところで出て来た仁和寺の親分には孔雀経の法を、天台宗の社長・覚快さんには「七仏薬師の法」と言つて七体の仏様に団体で効果を上げて貰うお経をあげて貰った。その上に三井寺の管長で後白河法皇の息子でもある円慶さんには、其処の本尊・金剛童子に特別に祈つて貰った。この仏様は秘仏とされていて滅多に面会などしなかったらしい。

その他、五大虚空蔵（法界、金剛、寶光、蓮華、業用）とか、六観音（千手、聖、馬頭、十一面、准胝）じゅんていを招集して祈祷を行わせ他にも訳の分らない修法を残らず行わせた。非科学的な仏教の内容であるから原本にある修法の名前だけを列記して置くと「一字金輪」「五檀の法」「六字加輪」「八字文殊」「普賢延命」などで、それらを残らず行わせたから護摩を焚く煙が当時の御所内に充滿していて、待機する消防隊が右往左往していた。それに加えて鈴の音が鳴り響き、経を読む坊さんたちも勤務評定に影響するか

ら馬鹿でかい声を張り上げていた。

原文に「…修法の声、身の毛よだつて、如何なるモノノケなりとも面を向かうべしとも見えざりけり」と、あるがモノノケが倒れる前に人間がやられる。その馬鹿騒ぎの後で、都に住む仏師の責任者に命じて等身大の主な仏像を造らせた（実在しない仏の等身大をどの様にして決めたかは不明であるが、それ程の大騒動をしたのだが肝心の中宮・徳子のほうは陣痛が激しいだけで出産の気配がない。日頃は威張っている平清盛も、是ばかりはどうにもならず、正室の時子（二位殿と呼ばれた）と二人で「どうしよう…どうしよう…」と途方に暮れているばかりである。

そういう状態であるから、全くの上の空であり、周りの者が何かを聞いたり指示を仰いだりしても「…どうでも、良いようにして置け」と、普段の清盛には考えられないような返事をしていた。後に清盛はそれを反省して「されど、合戦のことならば淨海（清盛の法名も是ほど臆病にはならなかったのに…）」と言っていた。清盛ほどの人物が為す術も無く右往左往する中で、見当違いでは有るが安産の加持祈禱を行う修験者として右大臣を務めた源頭房の孫である房覚僧正と藤原氏出の性雲僧正、神祇伯（じんぎはく）＝当時の筆頭官庁の長官）を務めた源頭仲の子・春堯法印（しゅんぎようほういん、法印は僧正の上、それに権僧都（僧正の下）の豪禅と実専の二人などが集められていた。このうち、実専は二条天皇時代に右大臣を務めた藤原公能の子とされる。

この修験者たちが、真面目に仕事をしている証拠として必要以上の大声を出しているから、その喧（やかま）しいこと。これでは中宮の安産を妨害しようとする悪霊たちも驚くけれども、産婦にも良い影響は与えない。一方で、後白河法皇は平清盛が憎いのだ

が自分の孫となると無事に生まれて欲しいから、先ず熊野神社にお願いをすることにした。熊野行きは長旅になるが自分で勧請した熊野神社が近所に在ったので、其処で間に合わせるつもりである。さらに中宮産所の近くで千手観音に所縁のある経文を読み上げながらヒラヒラとさせている中に、祈禱師が連れて来たサクラの童子たちが悪霊に扮して暴れていたのを止めておとなしくなった。そこで法皇が声高らかに叫んだ。

「この老法師がこの様に祈願をしたからには何者も女院（産婦）に近づいては成らぬ。特に現在、出現している怨霊どもは、皆、我が朝恩（皇室の恩恵）に依って出世した者たちであろう。たとい感謝の念が無くても、中宮出産の妨げを成すのは幽霊の道に背く行為である。速やかに消えて無くなれ！」――さらに声を張り上げて「女人生産しがたらん時に臨んで、邪魔遮生し、苦忍び難からんにも、心を致して大悲呪を称誦せば、鬼神退散して安楽に生ぜん（中宮が難産で苦しんでいるのは悪霊どもの仕業であるから、千手経に書かれた大悲の呪文を心から唱えれば必ず安産が得られる）」と言われた。そして値段の高い水晶の数珠を揉まれたのである。すると忽ちに効果が現れ、中宮の出産が無事に済んだのみならず、男児の誕生が実現したという。安産は法皇のお蔭？…。

いずれにしても念願の皇子が無事に誕生したのであるから大騒動である。先ず徳子中宮の実弟で、後に頭中将（とうのちゅうじょう）＝天皇の側近を兼ねた近衛中将）になる平重衡（たいらのしげひら）が、其の時は未だ中宮亮（ちゅうぐうのすけ）＝従五位下の職・皇后付き中間管理職）であったが御簾（ぎよれん）＝産室のすだれ…此の場合は近くの控えの間から出てきて、周囲に向かって「御産が無事に済み、皇子が御誕生になりました！」と声

高らかに叫んだのである。

是を聞いた後白河法皇を始め、関白以下の大臣、公卿、殿上出仕を許された公家やら、怪しげな御祈禱をしていた連中から、その助手を務めた者、更には余り役に立たなかった陰陽師の頭から医者とは言っても薬草の管理しか出来ない者たちが、自分の手柄のように喜んだ。宮中で殿上に昇れる身分の者も、そうで無い者も平家屋敷に集まっていた連中は一樣に（義務的に喜んだ者も居たとは思うが）喜び合う声が門外にも響き渡って暫くの間は鳴り止まなかった。

中宮の父親である平清盛は、余りの嬉しさに権力を欲しい俥にするワンマン爺の立場を忘れて声を上げて泣いた。「喜び泣き」とはこういう場合を言うのであろう。小松殿こと平重盛は中宮のもとを訪れて金（きん）で铸造した銭、九十九文を生まれたばかりの皇子の枕許に置き「王者は天を持つては父とし、地をもつては母と定め給へ」。

御命は方士・東方朔（仙人）が齡（よわい）を保ち、御心には天照大神入り変わらせ給へ」と唱えて桑の弓、蓬（よもぎ）の矢で天地四方を射た。

是は男児誕生に際して行う儀式で中国伝来のものである。しかし中国譲りが良く無かったらしく、やがてこの皇子は平家滅亡の余波を受けて小学校入学の年齢にして壇ノ浦に沈まされてしまう。

公卿揃（くぎょうぞろ）のこと

平家物語には、この後に「○○揃」という題名が幾つか出てくるようであるが、別に深い意味が無く、此の場合は公卿のメンバーが集まっただけのことを大袈裟に表現したらしい。平家物語でも「公卿」

「公家」のことが出てくるが「クゲ、クギョウ」なる人種については分かつているようで不明なことが多い。本来は天皇のことを「くげ」「うえ」「おおやけ」「うち」などと呼んでいた。其処から宮中に出仕する連中を「公卿」と書いて「くげ、くぎょう」と呼ぶようになったようであるが、是にはヤカマシイ規定があつて、正式には宮中出仕の公務員にも「公卿」「殿上人」「地下（じげ）」の区分があり「公卿」は大臣、大少納言、参議、それに位階が三位以上の者であり「殿上人」は四位・五位で昇殿を許された者（巻一、殿上の間討ち）記載、そして「地下」は未だ昇殿を許されない宮中勤務の者……ということになる。

その後、特に武家政権の時代になって「武士」で無く天皇に仕える者を「公家（くげ）」と呼んだようであるが、是も本来は「天皇」を指す言葉であつたらしい。いづれにしても権威だけヒケラカシテ中身が無い連中であるから「くげ」でも「くらげ」でも良いのだが、なるべく原文に書いてある通りに書いて行くつもりである。

治承二年十二月十五日に平清盛の娘で高倉天皇の許に送り込まれた中宮の徳子が難産の末に言仁（ときひと）親王を生んだ。この章段は親王誕生に依る宮中の大騒ぎの様子である。何しろ権威と伝統以外には何も無い世界のことであるから形式的かつ無駄な行事が続く。登場する人物も律令制の官職で表されるが、数年後に登場する源頼朝が鎌倉幕府を開いて武家政治を始めると、独自の権威を創り出してしまふから、公卿たちの持つ官位も有名無実のものとなり、光を失ふことになる。

何れにしても皇子誕生となると先ず「乳母」が必要になる。乳母と言っても皇太子の乳母となれば自

分で子守唄を歌うようなことはせず、名目だけの役であるから最初に平清盛の北の方が予定されていた。この女性には宰相殿と呼ばれた平教盛の娘で、鬼界が島に流された藤原成経の妻とは姉妹であつたと思われる。ところが此の乳母候補が病死してしまつたので、大納言・平時忠の北の方である「帥佐殿（そのすけの）」が選ばれた。

何事も格式の世界であるから、乳母にも位階が必要であり、やがて帥佐殿は「帥典侍（そのないし）」と呼ばれた。「典侍」は女官の階級のようなもので従四位（近衛中将などと同格）に当る。生まれた皇子も健やかで産婦（中宮）も無事というので、後白河法皇もお歸りになることとなり、「本当は清盛と一緒に居たくなかつた」と言つたかどうか：車が門前に寄せられた。入道相国（清盛）は嬉しさのあまり砂金千両、駿河国産の富士の綿（名産とされた）二千兩分を法皇に献上した、と書いてあるが嵩張る綿は貰つても迷惑なような気もする。原本に「しかるべからずとぞ、人々さやささはれける」と書いてあるのが気になる。

平清盛の喜びに水を差す訳では無いが、此の度の御産に際しては人々が聞いて驚くようなことが多くあつた。先ず後白河法皇が修験者のように自ら御祈禱をされたこと。皇妃が出産された場合の行事として「甗（こしき＝素焼きの土器）」を宮殿から落として割る習わしがあり、皇子誕生には南へ、皇女の場合は北へ落すのに、今回は間違えて北へ落してから誤りに気付いて一騒ぎしてから落とし直した。無責任な連中は「是は良くない！」と密かに囁き（ささやき）合つていた。

そう言うことが有つたので、平清盛は困つたことだと途方に暮れた様子であつたが、さすがに平重盛

は落ち着いた態度で諸事を取り仕切つていたのが立派である。中宮の出産と言う平家にとつては誠に目出度いことでは有つたが、少し残念であつたのは、重盛と共に行事の中心になつて活躍すべき右大将の宗盛が、既に述べたように最愛の北の方が亡くなつてしまつたので大将の職を辞して屋敷に籠つておられたため、兄弟揃つて宮中に出仕することが出来なかつたことである。二人が奉仕出来たならば、さぞ目出度かつたであらう。

次に七人の陰陽師を呼び寄せて千度のお祓い（祝詞を千回読み上げる＝読むほうも大変だが、聞く方も辛い）をさせたのであるが、七人の中に安倍時晴という高齢の者が居て、従者も多くないから仕事で会場へ来る際に人ごみに行く手を阻まれてしまつた。祝事を遠巻きにでも見物しようと大群衆が集まつたのである。原本には「たかなな（筍）を込み、稲麻竹葦（とうまなくい）の如し」とある。安倍時晴は「私は役人である。道を空けよ！」と叫びながら群衆を押し分けて出仕して来たのであるが、揉み合う中に右足の靴を踏み潰され商売衣装の冠も突き落とされてしまつた。

その様な有り様で、大切な儀式に服装が大事な陰陽師がヒドイ格好で上がつてきたので若い公卿などが堪え切れずにどつと笑いこけた。陰陽師は商売が「反陪（へんぱい）」と言つて足踏みをするにも無駄には足を出さないのに、この様な目に会うとは……その時には笑いごとで済んだけれども後になつて思い合ふ事が多かつた。

中宮の御産に伴つて宮中への参内は当然ながら、御祝のために六波羅の平家屋敷に來た（平清盛に挨拶した）高官の顔ぶれは次のとおりである。

関白松殿（藤原基房）、太政大臣妙音院（藤原師長）、左大臣大炊御門（おおいのみかど＝藤原経宗）右大臣月輪

殿（藤原兼実）、内大臣小松殿（平重盛）、左近衛大将（藤原実定）、大納言（源定房、同（三条実房）、同（五条国綱）、同（藤原実国）、按察使（あぜちし地方監察官、藤原資方）、中納言（藤原宗家、同（藤原兼雅）、同（源雅頼）、権中納言（藤原実綱）、同（藤原資長）、同（平頼盛）、左衛門督（衛門府の長・平時忠）、検非違使別当（けびいしべつとう）検事総長・警察庁長官、藤原忠親）、参議兼近衛中将（藤原実家、同（藤原実宗）、同（源通親）、参議（平教盛）、同（藤原家通）、同（藤原頼定）、参議兼左大弁（藤原長方、大弁は参議の下、従四位上）、同（藤原俊経、大弁で三位）、左兵衛督（さひようえのかみ）兵衛府の長・藤原重教、右兵衛督（藤原光能）、皇太后宮大夫（こうたいこうぐうのだいぶ、藤原朝方）、左京大夫（現代の都知事のような職、藤原長教）、太宰大式（ださいのだいに）太宰府の次官・実質的な長官、藤原親宣、新三位（三位は中納言級、藤原実清）——以上の三十三人である。

このメンバー中にも、行きたく無かった者も居たと思うが：服装は原文に「右大弁の他は直衣（のうし）礼服ではなく普段着」と書いてある。右大弁は太政官の役人であるから、直属上司の諸大臣などと会うことを考慮して礼服にしたのであろう。要職に在った者で御祝に来なかつたのは前太政大臣の藤原忠雅、大納言の藤原隆季など十余人であるが此の連中も日を改めて、正装で平清盛の居る西八条邸に向かったと言われる。宮仕えは昔も今も辛いということである。

大塔建立（たいとうこんりゅう）のこと

ある程度の予想は出来たのだが此の章段も皇子誕生に伴う仏教行事の話なので現代的感觉では目出度

いのか悲しいのか判断に苦しむ内容である。「御産」の章段で述べたように、中宮・徳子の産室を取り巻く場所は、僧侶たちが焚きあげる護摩の煙と下手な経文の合唱で大火災の現場より酷い阿鼻叫喚の巷（あびきょうかのちまた）と化したのであるが、その功績？に対する報償として坊さんたちが御褒美を頂く……と言う何とも有難くないことが行われることになった。

先ず「赦文」の章段に出て来た仁和寺の守覚法親王は、その管理下にある東寺（教王護国寺）を修造して貰い、更に毎年、正月に宮中で行われる国家鎮護と五穀豊穡を祈願する「大元の法（七日間の法要）」を担当させて貰うことになった。また弟子の覚成僧都は階級が上がって法印になった。

天台宗のナンバーワンである座主（ざす）の覚快法親王は、親王の位階の二番目である「二品（にほん）」に昇格して牛車に乗ったままで宮中に入りが出来るようになった。当然、牛がモウ反対をしたかどうかは分からない。また、覚快法親王の推挙により、弟子の円良法眼（ほうげん）が法印に昇格させて貰った。そのほかの勲賞は一々記すことが出来ないほど多かったのである。

主人公の中宮徳子は、難産ではあったが回復が順調であり、予定の日数を経て六波羅の実家（平家屋敷）から内裏へと帰って行った。入道相国夫妻は、娘を皇妃に送り込んだからには是非とも皇子が誕生して貰って其の子を皇位に就け、自分たちが天皇の祖父父母として仰がれることを願っていたのである。其のことを日頃から崇拜する安芸の厳島神社に祈願をしていた。原本に「月詣でを始めとして……」と書いてあるが、遠方の厳島神社へ毎月、行ったのではあるまい。手近な神社で済ませたのだと思う。それでも

お札の「通信販売」という手もあるから、それなりの御利益があつて中宮が懐妊し、清盛の願いどおりに皇子が誕生したのであるから目出たいことである。そもそも平家が安芸の宮島を信仰するようになったのは、どの様な切っ掛けであつたかと言えば鳥羽上皇の時代、平清盛が未だ安芸守（広島県知事）であつた際に「安芸の国から搾り上げた税金をもつて高野山の大塔を修理せよ！」という命令が下つた。年代で言うと久安二年（一一四六）から保元元年（一一五六）の間である。これは高野山金剛峯寺の金堂近く（東北部に在った高さ十六丈（約四十八メートル）の大塔が落雷で焼けたのを修理させられたのである。其の時に政府は藤原一族末流の遠藤六郎頼方なる人物を事務担当に寄こしただけで一切の費用は出さなかつた。是は現代の様に「政教分離政策」をとつたためでは無くて、単に政府がケチだっただけである。

清盛は文句も言わず（陰では言つたかも知れないが）久安六年に此の大事業を成し遂げた。工事が終わつてから清盛は改めて高野山に登り、大塔を拝み、奥の院へ入つたところ、何処から湧いてきたのか年若い僧侶が現れた。眉は霜が降りたように白く、額（ひたい）には波のように皺（しわ）を刻み「かせ杖」といつて下端が二又に分かれた杖を突いて出て来たのである。其の老僧が、しばらく世間話をしてから「……昔から今に至るまで、この山（高野山）は真言密教を護り続けて絶えたことが無く此の様なことは他に見られない。今、壊れた大塔の修理が終つたけれども『本地垂迹（ほんじすいじやく）神は仏が仮の姿で現れたもの……とする説』」による高野山の垂迹神が安芸の厳島神社と敦賀（つるが）の氣比（けい）神宮の二か所にあり、其のうち氣比神宮は栄えているけれども、厳島神社は酷く荒れ果てている。（氣比神宮は應神天皇など七神を祭

祀する旧・官幣大社）せっかく、貴方が高野山に参られたのだから、朝廷にお願いして厳島神社も修理（サービス）されてはどうか？そうすれば官位が思う俥に上がり、肩を並べる者が居なくなるほどの出世をするであろう。」と、振り込め詐欺に近い方法で言って何処かに立ち去っていった。

其の老僧が立っていた場所は、線香が香水が分らないが此の世のものとは思われない香りが残っていたのである。清盛は家臣に命じて怪しい爺さんの後をつけさせたけれども、数百メートルほどで姿が消えてしまった。「是は、ただびと」にあらず！多分、弘法大師（の幽霊であろう）と思ひ込んだ清盛は、尊いお方に遭遇した現の思ひ出にと、高野山の金堂に曼荼羅（まんだら＝密教に出てくる諸仏を描いた祈禱仏壇画）を描いたのであるが、西の曼荼羅は常明法印という専門の絵師に描かせ自分は東の曼荼羅を描こうとした。其の時に何を思ったのか、八葉の中尊の宝冠（はちようのちゆうそん）のほうかん＝曼荼羅の中で蓮の葉に座した仏たちの中央に描かれた大日如来がかぶる寶冠の絵を自分の血（首を傷つけた）で書いたと言われ、是は金剛峯寺に現存する。

都に戻った平清盛は、高野山で体験した不思議な出来事を鳥羽法皇に申し上げた。法皇も損をする話では無いから、感心をされて夢のような出来事を現させるために安芸守である清盛の任期を延長することにした。清盛は自費で厳島神社も修理することになり、鳥居の立て替え、社殿の作り替えに加えて百八十間（三百数十メートル）の廻廊をサービスでこしらえた。完成してから改めて清盛が厳島神社に参詣し、その晩に通夜をしていたところ夢を見たのである。

その夢では髪を結い分けた童子が宝殿の中から出

てきて枕許に立ち「神の使者」だと言って清盛の前に銀の帯を巻き付けた長刀（短めのもの）を置いた。その童子は「この剣をもつて一天四海（当時の全世界を鎮め、朝廷をお護りすべし）」と言ひ残して消えていった。社殿を修復して貰ったお礼は言わなかったようである。その為に、眼が醒めた清盛は少し不満であったと思うが、其の後に大明神から御託宣が有つて「そなたが忘れていたかどうか確かめて置きたいのだが、高野山で聖人に言わせたことは誠であるぞ。ただし平家に悪行があれば望みは子孫まで叶わぬことと思え」と言われてしまった。神様のほうが上手（うわて）だったのである。それ以来、清盛は不平も言わず厳島神社を信仰しており是は目出度いことである。

今回の部分は藤原成経らの赦免、安徳天皇の誕生など人間中心の話である筈のところ、相変わらず仏教がらみの内容になってしまった。ただ其の中にも厳島神社の童子や高野山の怪僧が「平家悪業への忠告」をしているのが、物語の大筋として納得できる点ではある。「その十二は「頼豪」からであるが是も坊さんの名前で申し訳ない。

（続く）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

8月9日(日曜日)ギター文化館 2015年コンサートシリーズ「里山と風の声コンサート」

終戦70周年記念イベント 第一部 映画『ひろしま』を観る会

（一回目上映 10:00 二回目上映 12:30）

第二部 詩の朗読とギターコンサート（15:00～）

詩の朗読:白井啓治 ギター演奏:亀岡三典

映画「ひろしま」のみの観賞:前売券1000円 当日券1200円

映画鑑賞とコンサート:前売券3500円 当日券4000円

※映画「ひろしま」は、被爆した子供達の日記を教育学者・長田新が編集した文集「原爆の子～広島の子～少年少女のうたったえ」を日本教職員組合が映画化を企画し、八木保太郎が脚本に書き下ろし、関川秀雄が監督した作品である。この映画の撮影は、未だ原爆の傷跡の深く残る1953年に、広島市民9万人がエキストラ出演や制作に協力し完成にこぎつけた。しかし、当時の時代背景の中で、国際映画賞を受賞しながらも劇場での一般公開は出来なかった。広島、長崎への原爆投下から70周年を迎える。いまだ世界から戦争をなくすことが出来ない現実を、映画「ひろしま」を観ることで改めて考えることが必要ではないだろうか。

ふるさと風の会9周年記念展

ギター文化館 2015 年 6 月 20 日・21 日(10:00~14:30)

ふるさとルネサンス講座受講生4名と講師が中心となって、会報「ふるさと風」を発行し5月で満9年となりました。兄妹会の劇団ことば座の第28回定期公演にあわせて「ふるさと風の会歩み展」を開催いたします。会員の書きためてきた小文を集めた文庫をはじめ、風の会の分科会として兼平智恵子が指導する「風のことは絵教室」の作品展示、伊東由美子が代表を務める玉里御留川学習会の発表展を開催します。皆様のお越しをお待ちいたしております。※ふるさと風の会展のお問い合わせは、打田昇三(0299-22-4400)兼平智恵子(0299-26-7178)伊東由美子(0299-26-1659)まで。

「ふるさと風の会」<http://www.furusato-kaze.com/>

※ふるさと風の会9周年展は入場無料です。

ことば座第28回定期公演

ギター文化館 2015 年 6 月 20 日・21 日(14:30開場、15:00開演)

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」第三十五話

朗読舞劇 緋桜怨節 (2015)

ことば座の定期公演も、今回で28回となり、ギター文化館発「常世の国の恋物語百」も第35話となりました。言語学的には確立されていませんが、元々「髷語」と呼ぶべき言語がありました。小林幸枝の手話舞は、当に髷語と手話が綾なす心の声を観る舞といえます。スケールアップした小林の手話舞を堪能していただけるように緋桜怨節2015版として手話舞を加筆した朗読舞劇をお楽しみください。

脚本・演出 白井啓治 / 朗読 しらみひろぢ / 手話朗読&手話舞 小林幸枝

詩の朗読

昨年に続き、札幌つむぎ人の熊谷敬子さんをお迎えし、詩の朗読をおとどけします。

白井啓治作：里の恋歌二編 朗読 熊谷敬子 しらみひろぢ

木田澄子作：それから崩れる春を抱いて 朗読 熊谷敬子

入場料金：2,000 円（小中学生 1,000 円）

ギター文化館（0299-46-2457）にて発売

ことば座

〒315-0013 茨城県石岡市府中 5-1-35

Tel 080-3125-1307(白井)Fax 0299-23-0150